

# イタリア人

寺田寅彦

青空文庫



今日七軒町しちけんちやうまで用達ようたしに出掛けた歸りに久し振りで根津の藍染町あいぞめちやうを通つた。親友の黒田が先年まで下宿していた荒物屋の前を通つた時、二階の欄干に青い汚れた毛布が干してあつて、障子の少し開いた中に皺くちやに吊した袴が見えていた。なんだかなつかしいような気がした。黒田が此処ここに居たのはまだ学校に居た頃からで、自分はほとんど毎日のように出入りしたから主婦とも古い馴染なじみではあるが、黒田が居なくなつてからは妙に疎うとくなつてしまつて、今日も店に人の居なかつたのを却かえつて仕合せに声もかけずに通り過ぎた。しかしこの家の二階は何となくなつかしい、昔の香がする。二階と言つて別に眺望が佳いのもなければ、

座敷が綺麗だという訳でもない。前にはコケラ茸ぶきや、古い瓦屋根に草の茂った貸長屋が不規則に並んで、その向うには洗濯屋の物が干が美しい日の眼界を遮ぎる。右の方に少しばかり空地があつて、その真上に向むヶ岡こうがおかの寄宿舎が聳えて見える。春の頃など夕日が本郷台に沈んで赤い空にこの高い建物が紫色に浮き出して見える時などは、これが一つの眺めになつたくらいのものである。しかし間近く上野をひかえているだけに、何どこ処か明るい花やかなところもあつた。花の時分などになると何となく春のどよみが森の空に聞えて窓の下を美しい人の群が通る事もあつた。欄干にもたれて何かしんみりした話でもしている時、程近い時の鐘が重々しいなりを伝え伝えて遠くに消えることもあつた。

いつたい黒田は子供の時分から逆境に育つてずいぶん苦しい思いをして来た男だけに世間に対する考えもふけていて、深い眼の底から世の中を横に睨んだようなところがあつた。観察の鋭いそしていつも物の暗面を見たがる癖があるので、人からはむしろ憚かられていたためか、平生親しく往来する友も少なかつた。そのひねくれたようなところが妙に自分と気が合つたのも不思議である。自分はどうかこうか世間並の坊ちゃんで成人し、黒田のような苦勞の味をなめた事もない。黒田の昔話を小説のような気で聞いていた。月々郷里から学資を貰つて金の心配もなし、この上気楽な境遇はなかつた筈であるが、若い心には気楽無事だけでは物足りなかつた。きまりきつた日々の課業をして暇な時間を無意味

に過すと云うような事がむしろ堪え難い苦痛であつた。ただ何かしら絶えず刺戟が欲しい。快樂とか苦痛とか名の付くようなものでなく、何んだか分らぬ目的物を遠い霞の奥に望んで、それをつかまえよう／＼としていた。小説を読んだり白馬はくばかい会を見に行ったりまた音楽会を聞きに行ったりしてゐるうちには求めている物に近づいたような気がする事もあつたが、つい眼の前の物に手の届かぬような悶もどかしい感じが残るばかりである。こんな事を話すと黒田はいつも快く笑つて「青春の贅沢」は出来る時にしておくさと言つた。半日も下宿に籠つて見厭きた室内、見厭きた庭を見ていると堪えられなくなつて飛び出す。黒田を誘うて当もなく歩く。咲く花に人の集まる処を廻つたり殊ことさら更に淋しい墓場などを

尋ね歩いたりする。黒田はこれを「浮世の匂」をかいで歩くのだと言っていた。一緒に歩いていると、見る物聞く物黒田が例の奇警な観察を下すのでつまらぬ物が生きて来る。途上の人は大きな小説中の人物になって路傍の石塊いしころにも意味が出来る。君は文学者になったらいいだろうと自分は言つた事もあるが、黒田は医科をやっていた。

あの頃よく話の種になったイタリア人がある。名をジュセツポ・ルツサナとかいって、黒田の宿の裏手に小さな家を借りて何処かの語学校とかへ通っていた。細さいくん君は日本人で子供が二人、未のはまだほんの赤ん坊であつた。下女も置かずに、質素と云うよりはむしろ極めて賤しい暮しをしていた。日本へ来ている外国人

には珍しい下等な暮しをしていたが、しかし月給はかなり沢山に取つているといふ噂であつた。日本へ来ているのは金をこしらえるためだから、なんでも出来るだけ儉約するのですと彼自身人に話したそうである。

黒田の居た二階の縁側に立つて見ると、裏の塀越しにイタリア人の家の庭から縁側が見下ろされる。二間けんあるかなしの庭に、植木といつたら柘榴ざくろか何かの見すばらしいのが一株塀の陰にあるばかりで、草花の鉢一つさえない。今頃なら霜解けを踏み荒した土に紙屑や布片などが浅猿あさましく散らばりへばりついている。晴れた日には庭一面におしめやシャツのような物を干す、軒下には缶詰の殻やら横緒の切れた泥塗どろまみれの女下駄などがころがっている。



雨の日には縁側に乳母車があがって、古下駄が雨垂れに濡れている。家の中までは見えぬがきたなさは想像が出来る。細君からして随分こんな事には無頓着な人だと見える。どうせあんな異人さんのおかみさんになるくらいの人だからと下宿の主婦は説明していたそう。しかし細君はごく大人しい好人物だといっているので近所の気受けはあまり悪い方ではなかったらしい。

主人のジュセツポの事を近所ではジューちゃんと呼んでいた。出入りの八百屋が言い出してからみんなジューちゃんというようになつたそうである。自分は折々往来で自転車に乗って行くのを見かけた事がある。大きなからだを猫背に曲げて陰気な顔をしていつでも非常に急いでいる。眉の間に深い皺をよせ、ちまなこ血眼にな

つて行手を見つめて駆けついているさまは餓えた熊鷹が小雀を追うようだと黒田が評した事がある。休日などにはよく縁側の日向でひなた赤ん坊をすかしている。上衣を脱いでシャツばかりの胸に子供をシツカリ抱いて、おかしな声を出しながら狭い縁側を何遍でも行ったり来たりする。そんな時でも恐ろしく真面目で沈鬱で一心不乱になつていように見える。こちらの二階で話し声がしていても少しも目もくれず、根気よく同じような声を出して子供をゆすぶっている。しかし子供が可愛くてならぬという風でもない。ただ一心に何事かに凝り固まつて世間の風が何処を吹くのも知る余裕がないといったようである。自分はこの場合を見かけるとなんだか可笑しくもありまた気の毒な気がした。黒田はあれはこの

世界に金を溜める以外何物もない憐れな男だと言っていた。五厘<sup>りん</sup>だけ安いというので石油の缶を自転車にぶらさげ、下谷<sup>したや</sup>の方まで買いに出かけるという事であった。八百屋などが来ると自分で台所へ出かけてやかましく値切り小切りをする。大根を歯で喰い欠いてみてこれはいけないと云つて突返したりする。煮焚きの事でも細君にはやらせないで独りで台所で何かガチャつかせながらやっていた。

花を尋ねたり、墓を訪うたり、美しい夢ばかり見ていたあの頃の自分には、このイタリア人は暗い黄泉の闇に荒金を掘っている<sup>もうじゃ</sup>亡者か何かのように思われた。とにかく一種侮蔑の念を抑える訳に行かなかつた。日露戦争の時分には何でもロシアの方に同情

して日本の連捷れんしょうを呪うような口吻こうぶんがあつたとかであるいは露探ろたんじやないかという噂も立つた。こんな事でひどく近所中の感じを悪くしたそうだが、細君の好人物と子供の可愛らしいのとで幾分か融和していらしい。子供は髪が黒くて色が白くて美しい。上の男の子はあの頃四つくらいで名はエンリコとかいうそうだが、当り前の和服を着て近所の子供と遊んでいるのを見ては混血児と思われぬようであつた。黒田はこの児を大変に可愛がつてエンチヤンくと親しんでいた。父親が金をこしらえあげた暁にこの児の運命はどうなるだろうかと話し合つた事もある。

ジュセツポの家で時ならぬ嵐が起つて隣家の耳そばだをてさせる事も珍しくない。アクセントのおかしいイタリア人の声が次第に高

くなる。そんな時は細君のことをアナタがく〜と云う声が特別に耳立って聞える。嵐が絶頂になって、おしまいに細君の啜り泣きすすが聞え出すと急に黙ってしまう。そして赤ん坊を抱いて下駄ばきで庭へ出る。憤怒、悲哀、痛苦を一まとめにしたような顔を曇らせて、不安らしく庭をあちこち歩き廻るのである。異郷の空に語る者もない淋しさ侘しさから気まぐれに拵こしらえた家庭に憂き雲が立って心が騒ぐのだろう。こんな時にはかたくななジュセツポの心も、海を越えて遥かなイタリアの彼方、オレンジの花咲く野に通うて羈旅きりよの思いが動くのだろうと思いやつた事もある。細君は珍しいおとなしい女で、口喧くちやかましい夫にかしずく様はむしろ人の同情をひくくらいで、ついぞ近所なぞで愚痴をこぼした事もない。

従つてこの変つた家庭の成立についても細君の元の身分についても、何事も確かな事は聞かれなかつた。今は黒田も地方へ行つてしまつてイタリヤ人の話をする機会も絶えた。

こんな事を色々思い出して帰つて来ると宅のきたないのが今更のように目に付く。よごれた畳破れた建具を見まわしていたが、急に思いついて端書はがきを書いた、久し振りで黒田にこんな事を書いてやった。

……東京は雪がふつた。千駄木せんだぎの泥濘はまだ乾かぬ。これが乾くと西風が砂を捲く。この泥に重い靴を引きずり、この西風に逆らうだけでも頬が落ちて眼が血走る。東京はせちがら  
い。君は田舎が退屈だと言つて来た。この頃は定めてますま

す肥ったろう。僕は毎日同じ帽子同じ洋服で同じ事をやりに出る。同じ刻限に家に帰って食って寝る。「青春の贅沢」はもう止した。「浮世の匂」をかぐ暇もない。障子は風がもり、畳は毛立っている。霜柱にあれた庭を飾るものは子供の襷袢むつきくらいなものだ。この頃の僕は何だかだんだんに変わって来る。美しい物の影が次第に心から消えて行く。金がほしくなる。かつて二階から見下ろしたジュセツポにいつの間にか似てくるようだ。墮落か、向上か。どちらか分らない。三月十四日ペンで細字で考え書き書いてしまったのを懐にして表のポストに入れに出た。そして今書いた事を心でもう一遍繰り返しながら、これを読んだ時に黒田の苦い顔に浮ぶべき微笑を胸に描いた。

(明治四十一年四月『ホトトギス』)



# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

初出：「ホトトギス 第十一巻第七号」

1908（明治41）年4月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「伊太利人」です。

※初出時の署名は「藪柑子」です。

入力：Nana ohbe

校正：川向直樹

2004年6月16日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# イタリア人

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>